

2014 年度
非文字資料研究センター 第 5 回公開研究会

『日本近世生活絵引』 奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界

日 時：2015 年 3 月 21 日（土）10：00～17：00

会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 3 号館 405 室

開会挨拶：内田青蔵（非文字資料研究センター長）

趣旨説明：小熊誠（非文字資料研究センター研究員）

報 告：富澤達三（非文字資料研究センター客員研究員）

豊見山和行（琉球大学 教授）

得能壽美（法政大学沖縄文化研究所 兼任所員）

川野和昭（南方民俗文化研究所 主宰）

コメンテーター：

安里進（沖縄県立博物館・美術館長）

田名真之（沖縄国際大学 教授）

真栄平房昭（琉球大学 教授）

本村育恵（青山学院大学大学院文学研究史学専攻 博士後期課程）

コーディネーター：

小熊誠（神奈川大学大学院 教授）

渡辺美季（東京大学大学院 准教授）

弓削政己（奄美市文化財保護審議会長）

公開研究のあらまし

小熊 誠

このテーマの公開研究会は、2014 年 10 月 26 日に沖縄県立博物館・美術館で既に開催されている。この絵引きの内容は、まさに沖縄に関連するものであり、どうしても地元の方々にご報告したいというメンバー一同の強い気持ちがあり、沖縄で第 3 回公開研究会として開催した。その時は、150 人入りの会場が満杯になるほどの方々が参集してくださり、大盛況であった。この事からも、沖縄の人々が、琉球の歴史に興味を深く持っていることがよくわかる。

しかし、このまま非文字資料研究センターでの報告なしにこのプロジェクトの仕事を終わらせるわけにはいかないだろうという意見があり、神奈川大学での公開研究会を開催することとなった。報告とコメンテ

ーターは、沖縄での公開研究会とほぼ同じではあったが、沖縄県立博物館・美術館の安里進館長にコメンテーターとして新たに参加いただいた。さらに、奄美史研究者の弓削政己さんからも研究に基づく貴重なご意見が寄せられた。このお二人の文章は、後半に掲載していただく。

発表の内容は、ニューズレターの前号（第 33 号）に渡辺美季先生が書かれているので、ここでは神奈川大学での公開研究会で議論されたことについて若干紹介したい。

奄美・沖縄の生活絵引については、すでに非文字資料研究センターの前身である 21 世紀 COE プログラム「人間文化研究のための非文字資料の体系化」の時代に、当時の拠点リーダーであった福田アジオ先生が事前調査を始められ、沖縄で『琉球寫真景』などの資料を実見・検討されていた。それを受けて、渡辺美季

先生と私がこのプロジェクトを始めた。

このような経緯があるので、公開研究会では福田アジオ先生に質問の口火を切っていただいた。福田先生は、近世絵引を日本だけでなく、東アジアに対象を広げて研究を推進されたので、近世絵画に関する地域の違いに疑問を持たれていた。つまり、日本においては、庶民の生活を描いた近世絵画が多いが、中国や韓国ではそれが少ない。沖縄では、その状況はどうであるかという質問があった。

中国の絵画は、知識人を中心に「花鳥風月」や「山水」の自然を描く文人画が主流であり、人物画も高貴な人を描いていて、「清明上河図」のように庶民の生活を描くことは少なかったと思われる。琉球の時代、画家は中国に留学をしてその画風を学んできたため、琉球の絵師たちも山水画や歴代の琉球国王の御後絵などを描いていた。

このような近世琉球の絵画の中で、「琉球交易港図屏風」など一連の那覇港を描いた屏風図は、18～19世紀頃に描かれたもので、中国向けに描かれたものではなく、むしろ琉球に來た薩摩の在番奉行衆や商人の土産として買い求められて、その後薩摩や日本各地に流布したと考えられる。したがって、日本とは異なる琉球の風景を描き出しており、当時の那覇港に集まる中国船や薩摩船、那覇港周辺にいる琉球の人々や薩摩の人も描かれている。

また、「八重山蔵元絵師画稿」は、当時の行政府であった蔵元に勤める絵師のメモや習作集である。蔵元絵師の仕事は、異国船が漂着したとき現場に行って難破船や異国人を実写し、報告書資料を作成することで、現在の写真師のような機能がかった。この画稿集にも異国人が描かれている。あるいは、八重山の年中行事や祭りなど人々の生活を描いて、それを巻物などにして薩摩藩や首里からの役人の土産や献上品にした。そのため、当時（19世紀頃）の八重山の庶民の生活が描かれており、絵引に最適な題材となった。

「琉球寫真景」は、京都在住の絵師岡本豊彦によって19世紀に描かれた、11景からなる奄美大島の絵画である。風景だけでなく八月踊りや大和相撲なども描かれているし、そこに描かれている有形民俗資料は、薩摩と琉球との比較も可能な題材となっている。

今回の『日本近世生活絵引奄美・沖縄編』では、那覇、八重山、奄美大島と、琉球諸島の中心と南北の絵画を

選んで、そこに描かれた人々の歴史や民俗を専門家による共同作業で基本的な分析作業ができたと思われる。しかしながら、県立広島大学の岡本弘道氏からも指摘があったように、そこに「描かれていないもの」を取り上げると、さらに深い分析が可能となったように思われる。

例えば、田名真之氏は、那覇の各地にあった墓地が描かれていない、あるいはハーリーや馬競争の行事が描かれているのに綱引きが描かれていないことを指摘した。真栄平房昭氏も、女性が描かれているが、女性の手にはどこされたハジチ（刺青）が描かれていないことを指摘している。これらを考えると、この屏風図を描いた目的をより深く読み取ることが可能であろう。

さらに、豊見山和行氏の報告では、文献資料と付き合わせていくと、そこに描かれた物が文献資料の記述と対応するものが見えてくるので、図像からだけでなく、図像の外にある文献資料と組み合わせて分析する必要があることが指摘された。

今回の公開研究会では、絵引作業で担当者が議論してきたことからさらに広範な問題点の指摘が行われた。絵引を刊行しただけではなく、それをテキストとしてさらなる研究プロジェクトを組織して奄美・沖縄の絵引研究を展開する必要があることを痛感した。

王府の絵図調製事業からみた首里城那覇港鳥瞰図

安里 進

首里城那覇港鳥瞰図と「首里古地図」

琉球王国時代の18世紀から明治にかけて、那覇港や首里城を主題にした鳥瞰図が多数制作された。近景に那覇港、遠景には首里城を配置した大パノラマ鳥瞰図や、首里城や那覇港の鳥瞰図などだ。これら鳥瞰図の制作時期については、絵師が「当時の首里那覇」を描いているという前提で、描かれた諸施設の造営年代を手掛かりに制作年代の上限と下限が絞り込まれてきた。しかし、この「前提」には問題がある。

これらの鳥瞰図が制作された当時、すでに王府によって首里城や寺社、聖域などの「重要施設絵図」や「首里古地図」のような広域図が作製されていた。重要施設絵図は、王府の祭祀や儀式あるいは行政上の各種イベントを行う重要施設の会場図だ。施設の改築や



重要なイベントの際に作製されたようで、図帳にして管理されていた（安里 2013）。

これまで、「首里古地図」の製作年代については、首里全域を一斉測量して作製した城下図に当時の居住者名を注記したという前提で、描かれた施設の造営年代や居住者名から製作時期を押さえる議論が交わされてきた。しかし、「首里古地図」は、町方屋敷図調製事業で作製されていた各村屋敷図を接合した図に、首里城や寺社などの部分を既存の重要施設絵図から書き写した編集図と考えられる（安里 2014）。そして、各屋敷の居住者名については宗門改めなどの情報を利用した可能性がある。「首里古地図」のような編集図の場合、各情報源の年代とこれらを編集して1枚の図に仕上げたプロセスの解明が必要だ。

首里城那覇港の鳥瞰図にも、「首里古地図」のような編集図としての側面があるのではないか。たとえば、絵師の身分では容易に立ち入ることができない首里城のような空間については、重要施設絵図の首里城図などを参考にした可能性がある。鳥瞰図を制作した絵師には、王府の絵図調製を担当した貝摺奉行所の絵師がいたが（鎌倉 1982）、彼らは王府の重要施設絵図を閲覧できる立場にあったと考えられる。

鳥瞰図の首里城正殿と重要施設絵図

具体的に検証してみよう。1715年再建の首里城正殿は、『中山伝信録』の図のように「1間唐破風」に「直線階段」の石段がとりつき、奉神門は「3棟3門」で中央門が高く左右門が低かった。1728年に正殿が大破したため翌年再建。唐破風と正面石段が「改規」（改修）された。「首里古地図」にみるような「3間唐破風」と「末広階段」に改められたと考えられる。その後、1754年に奉神門が「1棟3門」に改修され、首里城は琉球処分を迎えた。

しかし、鳥瞰図の首里城はこの変遷どおりには描かれていない。1770年代に描かれた呉著仁（屋慶名政賀）の鳥瞰図「首里那覇全景図屏風」では、奉神門は当時の1棟3門だが、正殿には40年以上前の1間唐破風と直線階段が描かれている。1879年頃の友寄喜恒の鳥瞰図「首里城図」は、呉著仁鳥瞰図の首里城をそのまま踏襲しており150年以上も昔の正殿を描いていることになる。

1830年代後半～1844年に制作された滋賀大学蔵

の鳥瞰図「琉球貿易図屏風」では、正殿は当時の3間唐破風と末広階段だが、奉神門は80年以上前の中央門が高い3棟3門で描かれている。1808年～1887年の間に制作された浦添市美術館蔵の鳥瞰図「琉球交易港図屏風」には、滋賀大鳥瞰図の首里城をそのまま踏襲しているために、50年～130年以上も昔の奉神門が描かれている。

以上の事例は、絵師が鳥瞰図の制作に際して、重要施設絵図を参照したことを示唆している。古い首里城図を写したために40年や80年以上も昔の正殿や奉神門を描いたのではないか。そして、後輩絵師が、既存の鳥瞰図の首里城部分を踏襲したために、さらに昔の首里城を描いていることも指摘できる。

首里城那覇港を主題にした鳥瞰図には、いくつかの「瞬間」だけでなく「遠い昔」も埋め込まれている。

【引用文献】

安里 進 2013 「首里王府の重要施設絵図調製事業」『首里城研究』No. 15、首里城研究会。

安里 進 2014 「琉球王国の測量事業と印部石」『近世測量絵図のGIS分析 その地域的展開』古今書院。

鎌倉 芳太郎 1982 『沖縄文化の遺宝』岩波書店。

「琉球寫真景」のこれまでとこれから

弓削政己

一、第1図、シマ（集落）と藩の「麓」

奄美市では、シンポジウム「『琉球寫真景』と奄美」（2002）以降、全11図のうち第1図を基に、「薩摩藩代官が滞在した鹿児島島の景観のシマー奄美群島における仮屋所在地集落の比較検討会一」（2012）が開催された。山頂から代官所を眺めた情景をあらわした『大正3年10月下浣 重信印刷所編著 鹿児島県名瀬港』（林蘇喜男氏蔵）が契機となった。

坂道が一部描かれている（岩多雅明氏）が、「朝仁^{あさ}びら登てい／仮屋^{かりや}ながめいれいば／大和^{やまと}仮屋人^{ちゆ}ぬ／弓射^{きよ}り清らさ」とうたわれた「弓射り」や周辺の島役人居住地構成などから、馬場、筋、射場、代官所周辺の集落形態など薩摩藩外城「麓」との比較の必要性が石上英一氏から指摘された。その結果、喜界島、奄美市赤木名、名瀬、徳之島、沖永良部島全地域の5か所からの報告があり、伝統的シマ（集落）の存在と共に麓という藩の影響の空間が明らかになった。武具の訓練

場などについて、1862年、琉球への異国船対策で大和浜に駐留した時の日記『鹿児島県史料集（26）桂久武日記』（鹿児島県立図書館蔵）に、「鉄砲稽古」「弓射場」等の記載がある。つまり、同様に各島代官所には武具の稽古場が設置されていたことを読み取ることは可能であろう。

二、特徴のあるシマを対象

さらに、全11図中、第1図は代官所、最後の第11図は名瀬湊沖の立神、第6図代官所周辺と考えられる場での大島北部の影響を示した八月踊り、第8図船漕ぎ競争、藩の影響による琉球相撲から大和相撲への変容を示す第10図（津波高志氏）、以上5点が代官所周辺と考えられ、重視されている。また、この第6図は、女性が太鼓（チジン）を打っている。これは大島北部では一般的である。このことから、代官所周辺の踊りは北部の影響を受けていると言える。一方、徳之島、沖永良部島の風俗と考えられ、1895（明治28）年頃と言われる「鹿児島県大島郡風俗」（笹森家蔵）の太鼓の打ち手は男性である。

産物の図として、第3図売買可能な現物税上納の芭蕉布の糸（低品質は代砂糖）と第5図専売制商品の黒糖生産が描かれている。奄美諸島の二大産物であるためと考えられる。

シマの宇検は、湾の奥が「イセン唐船繫場」（「大島古図」と、異国船と関係が強い地域という特徴がある。琉球寫真景は、奄美大島の西側の特徴的なシマを対象に描いたと考えられる。



「鹿児島県大島郡風俗」の一部、「踊りの図」（笹森家蔵）

三、人物の環及び今後の課題

奄美大島に来島していない京都四条派岡本豊彦と薩摩藩四条派及び奄美大島を結ぶ人物は、作成背景を含め明確でない。

岡本豊彦と薩摩藩四条派の人物には、京都見聞役であった税所文豹（～1852）や親交のあった沖永良部島出自絵師の木脇啓四郎（1817～1899）、京都留守居役の田尻種実（1794～1855）らがいる（下原美保『『琉球寫真景』考』・『近世薩摩における大名文化の総合的研究』、原口泉、丹羽謙治『薩摩藩文化官僚の幕末・明治』）。しかし、京都藩邸関係史料は少ないと言う（松尾千歳氏）。

他資料との比較も必要である。琉球寫真景は名瀬、名音、宇検を描いている。近代ではあるが、作者不明、1881年の「大島郡島植物図稿」（国立国会図書館蔵）、前述「鹿児島県大島郡風俗」は、目的は違うが、琉球寫真景以外のシマを描いている（宇検のみ重複）。そのことは、彼らに琉球寫真景の知見があり、それ以外の地域を描いたとも考えられる。

この絵図作成の目的について、石上英一氏は、①「島津氏の南島支配誇示のための宣伝」、「婚姻関係上の上級の貴族か武家への贈答品」②「精緻な名瀬の描画など、統治の保安上の情報に関わるので、藩権力の了解が必要ではないか」という検討も必要だと言う。さらに、絵図作成過程について、①「朝仁越からの名瀬の俯瞰画は、名瀬・名瀬湾の平面図・街区図（たとえば白尾の赤木名図のような）」が前提②それを三次元の俯瞰図に展開させている③「そのため、名瀬の代官所の積極的な関与・了解が前提、絵師の巡行路との関わり」の視点も要すると指摘する。以上、若干の状況や課題を明らかにした。